

tab

No.
1
2006/11/15

後藤美和子
木村和史
石川和広
高野五韻
倉田良成

表二 Machilus thunbergii

「tab」発刊について

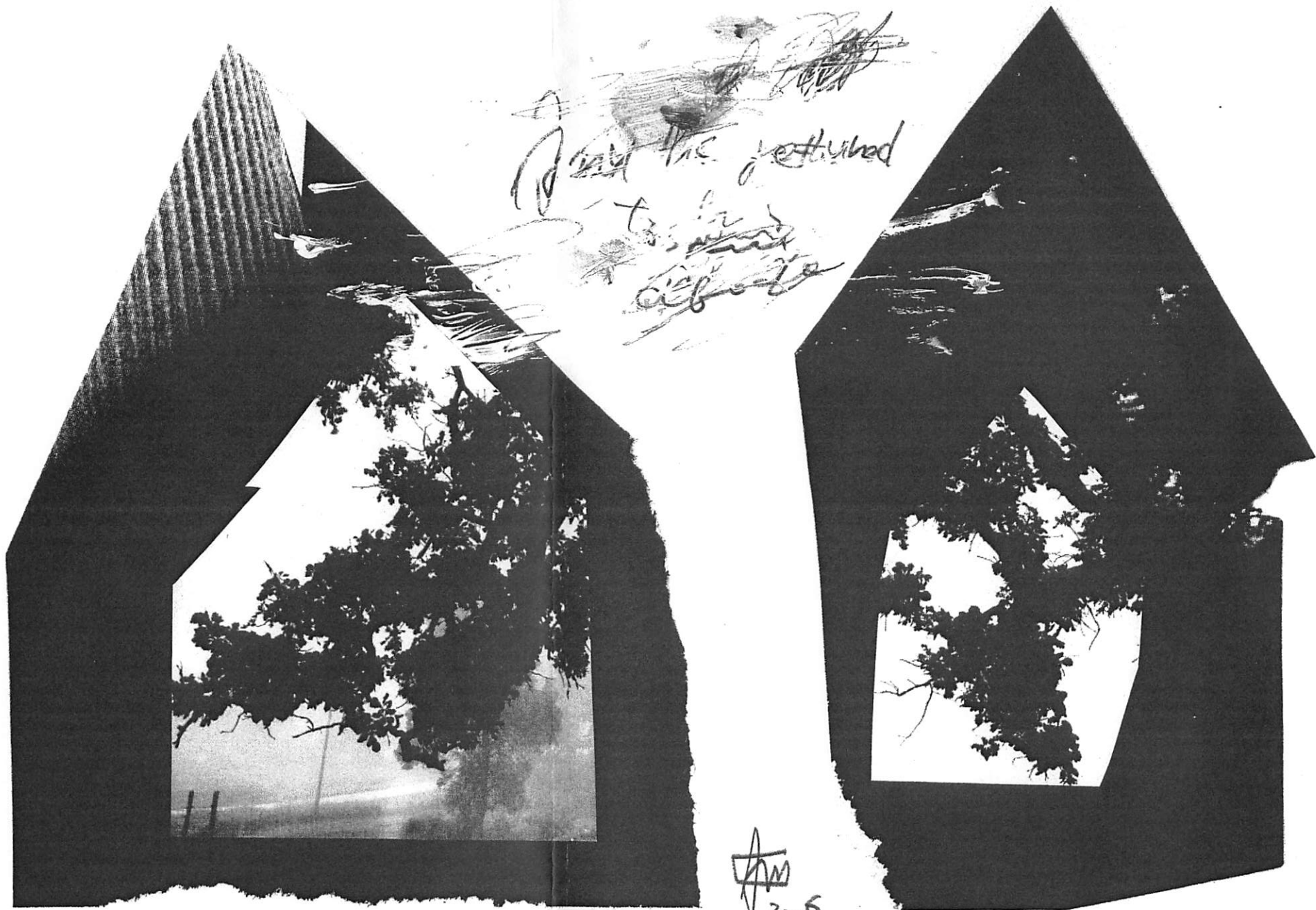
新しい詩と散文の表現媒体、まあ雑誌とっていいが、それを立ち上げることにした。編集責任は倉田がつとめる。同人制というのではなく、もっとゆるやかに考えて、とりあえずこの媒体の解纜にさいし、最初に乗り合わせる五人はいわば常連というか連衆というか。

そのやり方はそれぞれの作物をメールに貼り付け、まず倉田に電送する。倉田は受け取ったそれらを自分ところのキカイで編集し、本化していわば雑誌の原形を作り、それをプリントアウトしたいいうなれば版下の紙（綴じていない紙片だが）を各人に郵送、各人は受け取ったそれを必要な部数だけコピーして、自分の送りたいところへまた郵送する、というシステムである。

「書かれたもの」は単なる情報や情報の集積ではないと思う。書物が情報のファイルに過ぎないものではなく、絵や彫刻や音楽と同じ、人間にとって幻想と手触りを併せ持った文化的実体であるように、書かれた作品はほんらいモニタの向うにあるべきではないというのが私の実感だ。紙媒体ということに、あくまでもこだわるゆえんである。

「tab」とはご存じのとおり、キーボードで行うある桁から異なる桁へ「飛ぶ」操作なのだけでも、何かを吊したり引っ張り出したりするためのつまみの意もある。最初の連衆の一人である石川和広が、その「ウイトゲンシュタイン・ノート覚書」で書いていたけれど、あるディメンションから異なるディメンションへ、有から無へ、語りうることから語りえぬことへ、メビウスの環を行くように辿り、飛ぶ。そのなかで、今まで姿を見せなかった何物か・何事かを引っ張り出すよすがとなれば、と思う。

2006年10月 倉田良成記



Handwritten text in Japanese and English, including the phrase "I had the returned" and other illegible characters.

Handwritten signature and the year "2006".

画 / 和田彰

cont.

詩篇

- 後藤美和子：岩盤の上を／01.
石川和広：再生／02.
高野五韻：牛の眼／04.
倉田良成：秋のうれい／05.

文

- 木村和史：アイヌモシリに手作りの家を建てる／07.
石川和広：お帰りなさい／10.
高野五韻：おとをかざえて／12.
倉田良成：Sound in autumn nightーシヤ&サフを聴く／14.
あとがき集／16.

装画：和田彰

石川和広

再生

02-03

いつも遅れた

こども

わたしは

いつもはじっこ

冬空の雲

あの子がおそってきて

こどものわたしは逃げ続ける

汚れたドラえもんのトレーナー

こわれたタイムマシン

庭の桜はかたく

びりびりした朝が好きだった

悲しい雨戸

どうしようもなく過ごした

時間をどこまでもひきのばしている

わたし

みらい

によらい

縁起

歩いている四天王寺の通り

今きみと

悲しい雨戸

冬空の雲

かんちがいして明るい気分

想像できないくらい
の奇跡

硬く握り締めて
生まれなおそうと
していた

瞬間のわたし

ランドセルを
かっいでいた

縁起かっぐ

何をかっぐ

わたしの考える
未来をかっぐ

牛の眼

「おまえ、地にひざまずけ」

母を殺そうとした人は

牛のような眼をしたという

千年も前のことだ

凶事のさなかの

黒く潤んだ／黒目だけの眼

を満たしたのはたぶん

老母のつむじの向こう側の

いちまいだけゆれている／いちまいの葉のはやさ

太刀の重さに風景は痺れ

鈍さが森の内部を覆いはじめたとき

聴かれない声が通っていった

物語が通り過ぎ

古代の街道の風景が溶け去っても

ふたつの大きな黒眼だけは

ここに留まったままだ

この部屋のどこかで

見開かれている

※日本霊異記（東洋文庫版）中巻第三を参考にした箇所がある

秋のうれいに —— 堀川正美に捧ぐ4

うれいのなかで正しいものは降りてくるだろう

道芝、ヒヨドリ、ミズヒキの点々

あさぎ色した死に装束のシヨウリヨウバツタ

色色の葉が冷たい光に縊られながらふりしきる

海の青がかたくしずまるのを見晴るかす丘で

すこしの智慧は

ふいといなくなつた飼い猫の思い出ほどにも世界の秘密を語らない

ひそかなうずきのうちに示されてくるものは

ひとをめくらにする昼の花火、秋のジャズ、酔っぱらつたかもめ

胃の腑にぶちまけた焼酎の明晰な炎をとおして

ある厳冬

岸壁から見下ろしていたおそろしいほど甘く透明な港の水塊

それよりも、おそろしい愛

総毛立ちながらわれわれは音楽のなかに倒れこむのだ

カーニバルはいつでも世界のそとがわでにぎやかに沸きつつけ

そのことどうつし世は

かろうじて継続していることを知る

澄んだ太鼓の音が秋の日差しのみこころから脈拍のように通る

すでに廃墟の世界から

じょうじょうと流露するなつかしくて美しい、古くさい、ワルツの回転

通俗は思い出となつて

遠いのろし台の先で

一生を照りかえしてうごきつづける小さな火に変わる

だけれどもわれわれは、だが、

おまえらは、あいつらは、おれたちは、

みんなかったい、かさつかき、ほがいの芸人

卑劣な旦那にして

聖なる夜盗

すさまじい栄耀のやいばにきりさかれながら肅々と秋の深いところをあゆむ

清潔な痛み之光に色色に縊られながら

アメリカシロヒトリの糞虫の糞みたいにとんがって

風に吹かれて

野原の果てまでころがって

明日だって

過去でさえ、くれてやる、かがやくかりそめのながし場の

朝のレタスからあらわれた静謐な青虫におどろく

妻のきやあという声を永遠の居間で聞きながら

アイヌモシリに手作りの家を建てる

北海道の熊牛原野というところに家を建てることになった。手作りの、である。早ければ来年あたりから、雪が融ける頃を見はからって北海道へ渡り、町営住宅かどこかに仮住まいさせてもらうか、敷地にテントを張るかして、春から秋までの季節を素人大工として生きることになると思う。

熊牛という土地の名は、アイヌ語からきていて、熊と牛という意味ではもちろんない。「クマ」は、物干し棒（肉や魚やいろいろなものを干す棒）、「ウシ」は少しやつかいな言葉らしいが、知里真志保の地名アイヌ語小辞典に「Kuma usi」の説明として、「魚乾だなが群在しているところ」とある。土地の様相としては、アイヌのチセ（住居）があちこちに建っていて、庭先にはイトウ（かつては2メートルを越すものがうようよいたようだが、どんなふうに調理して食べたのだろう）、ウグイなどの魚を干した竿が並んでいる、あるいは、サケ漁の時期にみんなで獲った鮭を竿に干してたくさん並べてあるところ、ということになるだろうか。歩いて二、三分のところには釧路川が流れているので、魚や貝などの食料に不自由することはなかった土地だったと想像できる。

そこが今は、熊牛原野という地名で登記されている。温泉つき分譲地として売りに出されるまでは牧草地だったそうだから、はるか昔は熊がうろつき、アイヌのチセが見られなくなったあとは、牛がうろついていた土地であったことは間違いないようだ。

わたしが今住んでいるところは東京の立川近辺にある団地で、北海道は女房とわた

し両方の故郷にあたる。いずれは故郷に帰ろうとふたりで話し合っていたわけではなかったし、自分の家を自分の手で作るという夢を抱いていたわけでもない。土地の購入を決めるにあたって、あれこれ下調べをしたり、現地に足を運んだりということもしなかった。

分譲地の区画を記した図面を送ってもらい、女房とにらめっこしながら（面積に關しては当然のことながら小さな闘いがあつたけれども、そしてもちろん、わたしは大きな面積、女房は小さな面積を主張したのだったけれども）、闘いに（論戦に）勝ったわたしは、ここにしよう！と指差して、まるでドイツの旅みたいな決断をしたのだった。

その話は、分譲地の隣町で登記の仕事をしている義弟がもってきてくれたもので、分譲地を売り出している不動産会社とも付き合いがあり、けっして無謀な話の成り行きというわけではなかった。それでも、「こんな土地があるよ。温泉つきだよ。くみ上げじゃなくて自噴の温泉だよ。自噴は珍しいらしいよ」とわたしを煽っていた義弟が、いざわたしが食いつこうとすると、「ほんとなにいいの？ほんとに買うつもりなの？」となつたくらいだから、やはり飄筆から駒の話だったのかも知れない。義弟の言葉の裏には、「ほんとに北海道に帰ってくるの？それでいいの？ちゃんと考えたの？」という深い意味がこめられていたのだと思う。お世話になつていいる全体の先生に、ドイツの旅の話したら、

「そうよ、ものごとははずみで決めなきゃだめよ！」と言ってくれた。

そうか、ものことは弾みで決めるべし、なのだ。ダーツの旅でせんせんかまわないのだ。全体の勉強会のときにしつこく言われていることと、どこかつながる姿勢のようにも思える。まったくつながっていないような気もするのだけれども：

「いいなあ、北海道へ行ったら、木村さん、きつと元気になるわよ」

先生も、手作りでスローな自然生活に憧れていて、面白いからこれを読んでみたら、と「バーマカルチャー」という本をプレゼントしてくれたことがあったくらいだから、その意味では、わたしの夢を応援するしか道はないのだった。

二年ほど前、いろいろ疑問を感じるころがあった。全体の勉強をやめようと思い、先生に電話をしたことがあった。そのとき、「ほかの人になら、はいそうですね」と言えるけど、木村さんの体のことを分かっているから、やめさせるわけにいきません。今のうちにちゃんと手入れをしておかないとひどいことになるよ」と言われ、その断固とした言葉と温かさに感じるものがあった。それは、またよろしくお願いします」と勉強会に戻ったときにお世話になったリハビリの先生には、「歳をとったら、がたがたになるよ」と言われていたし、ふたりの先生によって、老後のわたしの姿が保証されたわけだ。

骨がはずれたり、折れて飛び出したり、割れたり、頭がぼんやりしたり、首が痛かったりしたせいで、もう十数年にわたって健康について否応無く考えさせられてきたわけだけれども、「健康であること」とは「自分で決められること」ではないかと思うようになった。

自分で決めるとは、強い意志や明快に判断する力のことを言っているのではなく、日常的な些細なことがらの一瞬一瞬を無意

識に、ごく普通に感じ取り、次につながる自分がそこからまた無意識に生み出されていくような、なめらかで、ほとんど無色の感覚を意味している。

自分がひとつに重ならないおかしな感覚で生きていた時期、ほんのちよつとしたきっかけで、霧が晴れたように自分が立ち現れるのを感じるころがあった。年に一度か二度、ほんとうに僅かな回数でしかなかったけれども。

「ああ、これが普通なんだよなあ：」誰に向かつてでもなく、自然な笑みと、安らかなため息がこぼれたのを覚えている。

だから、体も気持ちも無意識に前に出ていると感じられたら、そんな自分に感謝しつつ、心から微笑みたいと思っている。

ところで、先生がわたしのダーツの旅を祝福してくれたのは嬉しいのだけれども、「ひとりやっていけると思っているの？」とわたしを脅した言葉はどこへ行ってしまったのだろう。ここ二年ほどのあいだに、わたしはもうひとりやっていける体になってしまったのだろうか。そんなことなら、あのときに退会させてくれてもよかったのではないだろうか。それとも、ひとりやっていけるかどうかまだ心配だけど、ここはあえて祝福して送り出してあげようと思ってくれたのだろうか。

でもまあ、難しく考えるのはやめにして、わたしの決断も先生の祝福もそのほかのすべても、素直に前向きに受け止めることにしよう。なにごとにも、なるようになる。ならなければ、なるような道を見つけて歩き出せばいい。リハビリの先生も、「がたがたになるなんてほんとに言ったかなあ、気にしないで大丈夫だよ」と笑い飛ばしてくれるかも知れないではないか。

今年の夏、北海道のわが温泉分譲地を初めて見に行った。驚いたことに、74歳になるお爺さんが夏のあいだ東京からやってき

て、6年がかりでこつこつと手作りの家を建てていて、そんな無茶なことを考えるんじゃないと老母に叱られたわたしの夢が、無謀でもなんでもないことを証明してくれていたのだった。敷地をひとつはさんだ隣の一人暮らしのおじさんは、寂しさのあまりだとは思うけれども、「うちに泊まって家を作ったらいいよ」と言ってくれた。木工所でプレカットしてもらった材木を自分たちの手で組んで作ったという、義弟の友人の家もあって、ためになる話をいろいろ聞かせてもらうことができた。

その結果、そこら辺一帯は泥炭地で、2、3メートル下が岩盤になっていて、その上にある粘土層によって水が溜まり易い地層であることが判明した。基礎を作るために地面を掘ったら、水道管が破裂したかと思っただけの水が溢れ出たとか、重機で地面をばんと叩いたら、反対側の地面から噴水のように水が噴き出したところもあるという話だった。

北海道の凍結深度を考慮して1メートル以上地面を掘り、基礎を作って、などと基本どおりの作業をイメージしていたわたしの計画は、最初から練り直さねばならなくなった。

じつは、その区画を買うことを決め、払い込みも済ませ、温泉成分表とかすでに建っている家の写真とかを眺めながら夢を膨らませていたある夜、夢のなかに、まだ見ぬわたしの土地が出てきたのだった。そこは、畑のなかの大きな水溜りで、柔らかい藻のような水草に陽光があたっていて、夢のなかでわたしは思わず、こんなところに家を建てられるのかなあと呟いていた。

「チセ（住居）を建てるにあたり、まず土地の選定が行われます。場所としては海や川近くで、食料や水が豊富に得ることができ、しかも洪水や山津波、崖崩れなどの危険がなさそうな場所が選ばれました。場所

が決まると、この土地が家を建てるのに適しているかどうか占います。これは夢見て判断され、約七日間に建て主が悪い夢を見なければ、その場所が正式に決定されます。しかし、もし悪い夢を見たら、その土地に悪い神がついていると判断され、場所を変更したり、その土地を清めたりしました。」（アイヌ文化の基礎知識。アイヌ民族博物館。）

わたしの夢はもしかしたら、アイヌの水の神様、ワツカウシカムイのお告げだったのかも知れない。少なくとも悪い神がついている土地ではなさそうだと、夢の読み解きをすることにしよう。

日本地盤協会の本によると、北海道に開拓に入った人たちは泥炭地の開墾で大変な苦勞をしたようだ。畑だけじゃなくて、道路を作ったり線路を作ったりするときも、特別に手間のかかる工法が必要とされるらしい。

泥炭は石炭の半分ほどの熱量をもつ燃料として使われることもあるので、一年中炬の火を絶やさないアイヌチセが泥炭地の上に直接建てられていたとは考えにくい。が、とにかく泥炭地と共存して、アイヌはそこそこ不自由のない暮らしをしていた。シサム（隣人＝和人）は泥炭地を畑や道路に作り変えようとして大変な苦勞をした。わたしは泥炭地の上にアイヌチセとは違う家を建てようとして、あれこれ知恵を絞る必要に迫られている。知恵とはどこにあるものなのか、ということも含めて、さらなる試行錯誤が重ねられていくことと思う。

お帰りなさい

私は、リハビリ中の患者であり、そのために精神科デイケアに通所している。今は落ち着いて、少しずつ仕事をしたりしている。おおげさにいうと社会復帰みたいなものであり、そういう人のために、一日プログラムが組まれていて、料理をしたり、趣味のことをしたりしながら、生活のペースを作っていくための空間というものが、この世界にあるのだ。今回はそこで感じたことを書いてみようと思った。私は以前知的障害者のグループホームでの介護というのをやっていて、いわば健常者として、障害のある人に関わっていて、発病し、それから、5年くらいかけて、今の生活に辿りついた。

ある日、デイケアで、ある人が、私がトイレに立って、戻ってくるたびに、「お帰りなさい」というのに気づいて、ひどく困ったことがあった。私が、以前仕事をしていたときなら、冗談でも言ってみようと思ったのと思うのであった。なぜ口ごもるのだろうか？

また別の日、同じ人がみんなが笑っているのを見て、「何で笑ってるの？」と問っていた場面も見た。しかし、自分が笑われているのかといぶかしんでいる風でもなく、素朴に聞いているのであった。私も、誰も、答えられなかったけど、何度も、そういう場面があつて、いつしか慣れてしまった。みんながなぜ笑っているのか、その意味というと固いけど、雰囲気みたいなものがわからない様子であった。あるいは、自分はおかしくないのに、この人たちはなぜ笑ってるのみたいな。その逆に、その人だけ、全然大丈夫くない場面で、ひとり爆笑

したりして、少し、場の雰囲気に対して、いびつな感じなのだ。

しかし、その人は、人と何とかして仲良くなるうともしているのであるが、それで、どうもお気に入りの人にお茶を入れてみたり、トランプに誘ったりしているが、どうもトランプのルールをきちんと覚えていないくはぐさがあるのであった。それでも、私には内奥まではわからないにしても、特に絶望せず来ているようにも見える。いろんなことがあるのだが、いくつかの特徴があつて、それで、はっきりと印象にある。

私はしばらく考えてから、親しい人にも自分の仕事で出会った人のことも織り交ぜて、話してみた。(他のメンバーさんとも少しだけ話した事もある) そうすると、そういう現象は単純に、心の病からのものだけ云えるのだろうかという話になった。その人も発達障害の人に関わったことがあるので、ピンときたらしい。

ここでは、どういう障害なのかということとは問わない。それはわからないことだし、自分の仕事ではない。というか、医師でも、スタッフでもない私は偉そうなことはいえないのであった。しかし、隣人というか水平の他者として、私はその人と、単にあるがままにいるではないかと思ったりするわけだ。

正直言って、トイレから帰ってくるたびに、「お帰りなさい」といわれたら、相当な偉い人でない限り、やっぱりうんざりするものである。かといって、「うるさいよ」とツツコミをいれるのも、私のキャラというか立場ではないような気がする。そういうえばトランプもその人とはしばらくやって

いない。ある意味、どこかで差別しているのかもしれない気もしてくるが、このレベルになると差別っていうか…という気にもなってくる。私はマジメに考える人でもあるし、別の角度から見れば、そういう光景に慣れていく自分もあるしという感じもあるのである。だから、決定的なことはいえないが、ときには、居心地の悪い気分にもなるが、あるメンバーさんも云っていたように、その人に慣れるのがこのデイケアの第一関門ともいえるわけだ。私は単なる隣人として、だいぶ慣れてきている。かといって、それがいいことなのかどうかよくわからないけれど。

私がスタッフだったら、どうかとも想像してみたりする。これも、どうよと思うのだが、スタッフでないから、どうにかしないというのもどうかと思ったりもするのだ。でも、簡単にその人を変えられるとか思うのも傲慢とも思う。

今のところ私は、自分のベースで人の間にいるということを目指している。ときにはうんざりすることもあるけれど、その人はあまり体調も崩さずがんばってきているようだ。昔からずっとそうなのかもしれない。私は、何でも差別という人はやっぱり変だと考えている。差別はいけないことだとしても、この世界には、関わりの濃淡というものはあるのが普通だと考える。私はその人と単なる隣人として共にあることは何かと考えるのだ。

おとをかぞえて

開け放たれたベランダから、団地の中を走るトラックの音がする。よくわからない鳥のぢぢつというような声、車のドアを閉める音、遠いスクーターの音、すずめの声、これで五つ。商用車がバックする音もした。よくわからないばたばたという音。ばこという音。そんな一度きりの音がある向こう側ですつと鳴っていたようなのに、聴こえていなかったかすかなうなりのような音。波のような音。遠い音。このあたりまでくると、一つ一つの音を聴き分けることは難しくなってしまった。もう数えることなどできない。音の個体を包み込む皮膜は溶けてしまっているようだ。そこから振り返ると、まるで当たり前のように聴こえていたはずの身近な音たちの輪郭も、急に所在なく思われてきた。

最初に聴こえた音たちは、みな「○○の音」として意識のなかに現れてきた。それらはみな明瞭なかたちを持っているように思われた。その向こう側から聴こえてきたのは、何が鳴っているのかよく判らないが、音として確かに捉えられる音、「○○な音」と形容したり擬音語で言い表したりできるように思われるものだった。そしてそのさらに先におぼろげに聴こえるのは、音であるらしいとしかいいようのない、そういう広がりなのだった。

「○○の音」として、まず音を聴いてしまふという習慣は、考えてみれば奇妙なものである。車の音、のこぎりの音、鳥の声、なべの煮える音、子どもたちの笑い声、ギターなどの音、歌う声……。ほとんどの音はそのように聴かれている。そうでない、意味を与えられる前の音は、耳に入ってきて

いてもほとんどの場合、聴かれていない。音は常に何かの音でなくてはならないという、人間側の約束があるかのようだ。僕らが生きる意味の世界では、全ての音が「○○の音」であるのは当然なのかもしれない。だがそういう音の向こう側に、意味を与えられる以前の音が、やはり常に鳴っているというのも、耳を澄ませばすぐにわかる事実なのだ。世界の外皮は思わぬ近さにある。

僕たちはものを視るとき、そのものを視た、と思ってしまう。これは不思議なことだ。音がほとんど常に「○○の音」であるのに、視た瞬間に、「トラックの姿」「トラックの形」ではなく「トラックそのもの」だと思うというのはどういうことなのだろうか。「『姿』を見た」という言い方がされることもあるが、それはむしろ、「ような気がする」ような、むしろ視たという経験が疑わしいときのようにも思われる。確かにあの人の姿を見たような気がするのだけれど、とか。聴くことのなかで、「○○の」という形で音と意味が結びつけられている以上に、視るということのなかでは姿かたちと意味とが、わかちがたく一体化されてしまっているようだ。とらえられた姿かたちが、意味そのものであるとでもいうように。

そして多くの場合、その意味は問われることもない。一瞥のなかで、既知のもの、意味のあるものとされ、通り過ぎられていく。ほとんどの場合、本として本を視、家として家を、猫として猫を視る。そして全てが既知であるような世界で安穩としている。どんなに驚くべき風景も、モニターの出来事であれば、とりあえずは知って

いるものとして済ますことができる。そしてその「既知であること」を上台に、他の知覚が組み立てられる。正体不明の音は、それに基づいて「〇〇の音」になる。そこになんの疑いも差し挟まないのが、普段の僕らなのだ。それはただの習慣なのだが。

音を数えるという経験は、視ることを通して組み立ててしまっている、世界について約束事を露わにしてしまう。音を数えるようにして、世界を視るといふのはどういふことなのか。そんなことを考えながら、アスファルトに落ちる影と陽の境目の細部を視たり、吹き渡る風に揺れる梢とその向こう側の空を視ているうちに、名づけられていないものが、すでにそこにあることに気づく。そしてそれが視野全体の向こう側にひろがっていくのを感じる。

事物のかすかなうなりのようなもの、波のようなもの、遠いもの。その顕れに立ち会いたい。そしてそれを言葉に写し取ってきたいと思うのだ。

Sound in autumn night ——ミシャ&サブを聴く

この二〇〇六年の十月十日、ちょうど三年ぶりにミシャ・メンゲルベルク（ゴ）と豊住芳三郎（ds）のデュオを聴いた。三年前よりもっとずっと近いところで、ミシャや豊住の濃厚なプレゼンスを感じながら、である。場所は、千葉は稲毛のジャズ喫茶 CANDY、宵もやや深まった八時過ぎからのことだ。聴衆は二十人もいたか、どうか。

最初はオーケストラで言えば調弦にあたる音合せだと思った。ミシャと豊住のばらばらに叩く音が四、五秒もしたか。気づけばふいに、「演奏」はもう始まっている。

はじめのほうのミシャはなんだか病気、と言ってわるければ、長旅から来る疲労や風邪っ引きを思わせる沈鬱さで鍵盤に向かってるように見えた。一見、その場を支配しているのは挑発的に叩きつづける豊住のパーカッションの鮮明さだけみたいだったけれど、じつは地鳴りのように響いているピアノの存在感がなければ、表現された「音」のかたちとしてはおそらくわれわれは納得がゆかなかったのではないか。

いま沈鬱と書いたが、太く大きな指が鍵盤に軽く下ろされるとき、その天性の重さ、鍛えられた力、ほとんど無意識の正確さによって、音は驚くほど綺麗である。笑ってしまったのは、時折見せる肘打ちならぬ拳打ちとでもいうような鍵盤叩きの技だが、もっと笑ってしまったのは握った拳打ちから指を開いてふつうに叩くときに、まったく音が変わらないということだった。目をつむって聴いていたら絶対に判らないだろう。両手の十指をフルに使って、上半身を微動だにさせず、細かな音からなるパッセ

ージを叩いているのを見て、ビデオに映った演奏時のホロヴィッツとおんなじだ、と言ったのは横に坐っていた妻だった。事実、ミシャの音の現前を目の当たりにして、私たちが向き合っていたのは多分徹頭徹尾のヨーロッパだったのだ。ローマが終わって二十世紀の大戦争に到るまでの、連続した廃墟の時間に嬉遊する戦場のピアノリスト、真っ赤な野球帽を被ってこの夜あらわれたミシャにはそんな雰囲気がつきまとう。

時間が流れるにつれ、神を呼び降すお囃子みたいな豊住のドラムスの効験もあつてか、ミシャにも確実な降霊の時が来たように、さっきの沈鬱はかなんかを襲う憂愁のたぐいであつたとはつきり判る、脱日的に異質な演奏に変わっていった。ホロヴィッツとは言つたけれど、ミスタッチ、やろうとして瞬時の判断でやらなかつたこと、欠損、過剰その他いろいろ挙げようと思えば挙げられるが、では過剰や欠損は「何」に對してのそれであるのか。あれらは瑕疵ではなく、間然するところのない自由といううつし身であらわれた、紛れもない必然ではなかつたか。私たちは現に在るものに対して、現には無い貧しいイデーとしての物差しをいたずらに当てる陥穽におちいりがちである。あの夜、鳴っていた音に表現として欠けたところはどこにもなかつた。あばたやえくぼを含めたその音楽の性格からして、あの夜、あそこで響いたすべての音は、全部が正解であり、修正の介在し得ない完全な思い出であり、出された音の一つ一つは喜ばしい現^{げんじょう}成にほかならなかつた。こういう豊かさへ踏み出す勇気を、もつとわれわれは持つてもいいのではないか。

演奏の途中から豊住が二胡を取り出して、いきなり弾き始めたのにはびっくりさせられたが、あの木枯らしよりもっとすがれた弦のしのびねは、中国というよりはやはりユーラシアのアースカラーを思わせるのであって、ミシャの徹頭徹尾のヨーロツパが、この巨大大陸の端に位置する、ほんの小さな広場であることを改めて感じた。

三年前に彼らの演奏を聴いたとき、いろんなパフォーマンスに類する行為を「あくまでも音の顕現」と感じてそう書いたけれど、今回もそれはあり、もう一步踏み込んで考えてみた。豊住は時折ハイハットにスティックを打ち付ける寸前で止めるということをやっていたが、あれは「真似」としてのパフォーマンスではない。叩かれる寸前で叩く棒は引っ込められるが、多分そのとき「音」はまさしく実在しているのだと思う。無音ではなく、おそらく「非存在の音」として。ここでは非存在の音と発せられた音とはまったく等価である。ふつうの意味でも、音楽の休符というのは音楽の断絶ではなく、りっぱな「音」の一部といえるのだから。あの引っ込められたスティックは、まさしく沈黙の状態でそこに充滿している非存在の音の明らかな徴^{しるし}たる、休符の記号だったのだ（動く肉体を使つての）。われわれは、そこに沈黙の要素がなければ、そもそも音楽自体が発生・存在する余地さえないことを知っている。なにか、この世のありさまと似てはいないか。

ミシャと豊住のセッションは音のやり取りだけではない。声の掛け合いもあって、まあ、彼らの「音」の一つに組み入れられているのだろうが、私はもっと大きな意味での言葉（言語）を感じた。面白かったと思つたのは、彼らがおこなう鳥の鳴き声のような、あるいは全く未知の部族の喃語みたいに聞こえる喋りでの対話だ。鳥の鳴き声とは言ったが、鳥の鳴き交わす声とい

かえたほうがよいかも知れない。言葉を前にするときわれわれはまず概念的意味を求めるが、それ以前の言葉そのものの剥き出しの實在に出会うことがある。多く儀礼や神事や芸能に見られるが（また当然ライブ等でも）、一つの空間を共有することで、概念的意味を追わなくても、何が言われているか、求められる理解は何か、何となく正確に分かつてしまう場合がある。この掛け合いがまさにそれだった。概念的な意味を超えた「意味」そのものがあるといったような。禅問答や、芭蕉の言う「俳諧地」に一旦乗った連句の流れ、また、ある深みに達したシュールレアリスムの言語実験などに共通するところだと私は考えている。

さいごにアンコールがあつて、セロニアス・モンク（風）の曲を、豊住の二胡とのコラボレーションで弾いたミシャだが、指の回らなさとも見まがうモンクのピアノリズムをまるつきりトレースした上で、舌を巻く軽快さでもって西欧の哄笑する神々、テイル^{tail}ロイゲンシュピーゲルやガルガンチユア、フォルスタツフらの光と影を私たちにまざまざと幻視させて、一夜は終わった。

聴衆はおおむね若いのが大勢を占めた。彼らに今夜の演奏について何か聞いたとしたら、同感する答えが返ってくるかも知れないし、とんちんかんな答えが返ってくるかも知れない。けれど、それぞれがどう感じ、解釈しようが、この夜、ここにいた二十人弱の聴衆が向き合い、官能していた現実^{reality}は、同じだった一つのものなのである。演奏上のテンポを全く無視して、痙攣的な首振り運動をさかんにおこなっていた前列の若いのが、コーヒーを飲んでいる終演後のミシャに、感極まって何度も何度も「You are great!」を連発したのに対し、ベコちゃん人形みたいな赤い帽子の老ピアノストは彼を見遣り、優しげな低音で「I'm shit great」（私は糞偉大）と答えたのだった。

confidence

最近は、家作りの本を読むことが多い。役場の建築課の一級建築士の人に、「本を読むとわけが分からなくなるでしょう」と言われたのだけれども、確かにそのとおり。当たっているということは、建築業界そのものに、わけのわからない部分があることを意味しているようだ。第一、建築基準法がどうも妥協の産物としか思えないところがあつて、建築の知恵を絞った集大成とはお世辞にも言えないようだ。(ほんとは、読んでないんだけど)、基準法を守っていたら、理想的な家を作ることには絶対にできないと確信を持つて言うことはできる。わたしの建築予定地は原野なので、いちおう、何でも建てることができる。理想的な家を建ててもまったく問題がないのだ。問題は資金で、このためにわたしの理想は、もともと素朴な時代の藁と土の家に限りなく近づいていっているような気がする。(木村)

今日、池袋のペットショップでヒマラヤンネコを見た。生後三ヶ月で、妙に茶色くて、目は空色だった。眩しいのか、眠いのか、右と左の目が、まるきり違う所を見ていた。他の子猫たちとは離れて、道の真ん中の落とし物みたいに、何も無い所に座っていた。(後藤)

あの絵で、消し残しみたいな文字は、グバイドゥーリナの「リジヨイス」という弦楽デュオの曲から採ったもので「そして自分の家に帰った」。(和田)

BSE騒ぎによって取りやめられてしまったが、ついこの間まで高校の生物科の授業で、牛の眼球の解剖というのをやっていたらしい。このことを教えてくれた女学生によれば、牛の網膜は貝殻の内面のように虹色に光っていて、「本当にきれい」なのだそう。その虹色は牛自身によっては見られることのない美しさなのだ。僕にとつての眼中の虹とはどんなものか。『g』に書く中で見つけていきたいと思う。よろしくお願いいたします。(高野)

河島英五のうたに何度かはげまされただろう。詩を書く人はそんなに聴かないのかな？ そういえば、二十の頃、ふらりと出た旅先の宿のテレビから、英五の歌声が聞こえてきて涙したことがある。最近レンタルして聞いている。どの曲もいい。みんな『時代おくれ』みたいなイメージをもっているだろうけど。そんなことないよ。それは英五が引きうけていた役割だったんだよ。それくらい大きな人だった。繊細な人だった。私の町の祭りでも歌った。

六年前に四八才でなくなられた時は本当に辛かった。でも最近思う。自分で生きていくのだということ。私は「ぼんやりしたもの」が好きなのに『元氣だしてゆこう』みたいな、勇気の歌も好きだ。『元氣だしてゆこう。声かけあつてゆこう』で始まる。「声かけあつて」という言葉が似合う声をもつのは彼と、もうひとり忌野清志郎くらいかな？

どこかで自分でけじめをつけるときが来

る。やさしくするって何てむずかしいんだらう。そんなことを思う。へ世の中の人はなんとでも、なんとでもいうがいい。わがすることは、わが思ひは、われのみぞ知る。デカルトじゃないけど、こういう気持ちであるよ。頑なではなくて。(石川)

家のまわりで、ことしは金木犀が二回満開を迎えた。けっこう短いとは言えぬ年月を生きてきたつもりだが、こんなことは今までの経験にない。金木犀は色も匂いも好きなので、とくに覚えているのだ。そういえば夏の頭から今に至るまで、きれぎれに萩の花が咲きつづけているし、夾竹桃も同様で、妻などはこのあいだ、桜の花が咲いているのを確かに見た、と言う。彼岸桜ではないの、とまぜつかえしたが、彼岸桜が咲くのは春彼岸のころであって秋のそれではない。「パンセ」の中に、夜の地中海の彼方から一つの叫び声がして、それを聴いた舟人がローマ世界という古代が終焉するのを知ったとある。盈虚えいきょということは常に考えておかなくてはならないものだ。まずまず明瞭に世界の潮目が変わりつつある。それがどこに行くにせよ、生きている限りはそこから目を逸らさず、凝視してゆきたいと思う。(倉田)